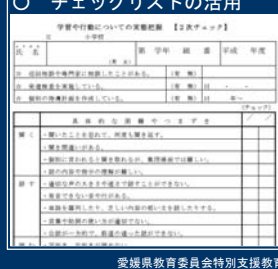


ス ラ イ ド 1	<p style="text-align: right;">講義パッケージ5</p> <h2 style="text-align: center;">実態把握のポイント</h2> <p style="text-align: center;">愛媛県総合教育センター 相談支援部 特別支援教育室</p>	<p>◆実態把握について研修を行います。</p> <p>◆用語の表記について、愛媛県教育委員会では平成28年4月1日より障害の「がい」を平仮名表記としておりますが、法令等から引用した場合は漢字表記のものもあり、この資料においても混在していることを御承知ください。</p> <p>◆研修時間は15分程度を予定しています。</p>
ス ラ イ ド 2	<p>研修の内容</p> <ul style="list-style-type: none"> ・実態把握とは、子どもを（ ）することである。 ・（ ）（ ）（ ）を通じて情報収集を行う。 ・現象面にとらわれず、行動の（ ）を理解する。 ・（ ）に目を向ける。 ・（ ）等に明記し、情報の共有と活用を図る。 	<p>◆本日の研修の主な内容です。</p> <p>◆これからの説明を聞きながら、（ ）の中に言葉を入れてみてください。</p> <p>◆このことについては、研修の最後に確認します。</p>
ス ラ イ ド 3	<p>実態把握の基本的な考え方</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 一人の子どもとして見る <ul style="list-style-type: none"> ・障がい名などにとらわれない。 ・その子ども自身の姿をとらえる。 ○ 「できること」を知る <ul style="list-style-type: none"> ・困難さばかりに目を向けない。 ・今できていること、これからできそうなことに注目する。 <p style="border: 1px solid yellow; padding: 2px; display: inline-block;">実態把握・・・子どもを理解する</p>	<p>◆実態把握を行う際の基本的な考え方についてです。</p> <p>◆教育を行う上で最も基本的なことですが、障がいの有無などに関わらず、一人の子どもとして見るのが大切です。</p> <p>◆発達障がいに対する理解が進むにつれて、診断名を意識される先生もいらっしゃると思います。しかし、誰にでも得意・不得意な面があり、「あの子どもは発達障がいかもしれない」などと決め付けることなく、その子ども自身の姿をとらえるのが大切です。また、診断を受けている子どもでも、その様態は様々であることから、障がい名にとられることなく、子どもの姿を見る姿勢が必要です。</p> <p>◆学級で気になる子どもの実態を見るときに、どうしても「できないこと」に目が向きがちになります。しかし、「できないこと」の影に隠れている「できること」も多くあります。「できること」「これからできそうなこと」に着目することは、支援・手立てを考える際の有効な手掛かりとなります。</p> <p>◆実態把握とは、子どもを理解することと言えます。</p>

ス ラ イ ド 4	<div>子どもの全体像をとらえる</div> <table><tr><td>基礎情報 (気になる点・願い)</td><td>背景情報 (家庭環境・生育歴・既往歴)</td></tr><tr><td>全般的知的発達の水準</td><td>認知や言語面の特性 (得意な領域・苦手な領域)</td></tr><tr><td>学習面の特性 (読み書き・算数など)</td><td>身体運動面の特性 (全身運動・微細運動)</td></tr><tr><td>行動面の特性 (注意、落ち着きなど)</td><td>対人関係・社会性 (友人関係など)</td></tr></table>	基礎情報 (気になる点・願い)	背景情報 (家庭環境・生育歴・既往歴)	全般的知的発達の水準	認知や言語面の特性 (得意な領域・苦手な領域)	学習面の特性 (読み書き・算数など)	身体運動面の特性 (全身運動・微細運動)	行動面の特性 (注意、落ち着きなど)	対人関係・社会性 (友人関係など)	<p>◆子どもを理解するためには、正しく実態把握を行うことが大切です。そのためにどのような観点で実態把握を行えばよいのか、その内容を挙げてみました。</p> <p>◆基礎情報として、先生・保護者等が気になる点や本人・保護者の願いを把握します。</p> <p>◆家庭環境や生育歴、既往歴などの背景情報ははじめとして、全般的な知的発達の水準、認知や言語面の特性、学習、身体運動面、行動面、対人関係や社会性などを把握します。</p> <p>◆多面的に情報を収集・整理して、子どもの全体像をとらえることが大切です。</p>
基礎情報 (気になる点・願い)	背景情報 (家庭環境・生育歴・既往歴)									
全般的知的発達の水準	認知や言語面の特性 (得意な領域・苦手な領域)									
学習面の特性 (読み書き・算数など)	身体運動面の特性 (全身運動・微細運動)									
行動面の特性 (注意、落ち着きなど)	対人関係・社会性 (友人関係など)									
ス ラ イ ド 5	<div>子どもを理解するための情報収集</div> <div><ul style="list-style-type: none">○ 行動観察<ul style="list-style-type: none">・授業や休み時間などの様子・友達との関わりの様子・テストやノート、作品など○ 聞き取り（本人、保護者、教員など）<ul style="list-style-type: none">・願い、家庭での様子、家庭環境や生育歴・学校や地域での様子・引継ぎ資料など○ 諸検査など<ul style="list-style-type: none">・直接的な評価の方法・間接的な評価の方法</div>	<p>◆情報の集め方を整理すると、まず、行動観察があります。そのきっかけとして、学級担任の気付きや周囲の先生からの相談、保護者や本人からの相談などがあります。その後、実際の子どもの様子を観察したり、本人と関わったりします。具体的には、授業や休み時間などの様子、友達との関わりの様子、ノートや作品などから、学習面、行動面、運動面など様々な情報を得ることができます。</p> <p>◆次に聞き取りがあります。保護者からは家庭での様子、家庭環境や生育歴、地域での様子などについて聞き取りを行います。また、校内の先生からの情報、あるいは、前籍園や前籍校の先生からの引き継ぎや、直接話を聞くこともあります。複数の人の見方を集約することは、実態把握の客観性を増すために大切です。</p> <p>◆また臨床心理士等が行う知能検査や学校で実施している学力診断テスト・単元テスト等からも子どもを理解するための情報を得ることができます。実際に子どもが行ったテストなどの結果を基に行う直接的な評価だけでなく、保護者などへの質問を通して行う間接的な評価の方法もあります。後ほど具体的な検査を紹介します。</p>								

<p>ス ラ イ ド 6</p>	<p>【行動観察】</p> <p>○ 観察と記録のポイント</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 把握したい行動を焦点化し、事実を具体的に書く。 ・ 場面の状況、周囲の人の行動を書く。 ・ 1日の記録や一定期間の記録を取ることで行動のパターンが見えてくることもある。 ・ 問題となる場面だけでなく、うまくいった場面を記録することが参考になる。 	<p>◆行動観察のポイントです。気になる子どもの実態の全てを正確に把握しようとする、大変な労力になります。また、それぞれの先生で、気になる行動の対象が異なるかもしれません。そのため、事前に把握したい行動を焦点化することが大切です。観察した結果を記録するときには「集中できる時間が短い。」のような表現でなく「授業開始後10分間は話を聞いたり、問題を解いたりしていた。」など、事実を具体的に書くことが必要です。本人だけでなく、場の状況や周囲の人の言動が要因となることがあるので、それも記録します。</p> <p>◆このようにして、1日または一定期間の行動記録を取ることで、本人の行動のパターンが見えてくることもあります。</p> <p>◆行動観察においても、問題となる場面だけでなく、うまくいった場面を記録・分析することで、支援や手立ての参考となることがあります。</p>
<p>ス ラ イ ド 7</p>	<p>【行動観察】</p> <p>○ チェックリストの活用</p>  <p>愛媛県教育委員会特別支援教育課HPよりダウンロード可能</p>	<p>◆行動観察をする際には、愛媛県教育委員会が作成したチェックリストを活用するのも1つの方法です。</p> <p>◆このチェックリストは県教委のホームページよりダウンロードが可能であり、チェック項目のリストを確認することで、子どもの実態を整理することができます。</p> <p>◆実態把握は、障がいの判断や診断を行うことが目的ではなく、子どもの学習や行動のつまずきに早期に気づき、適切な支援をすることを目的としていることに留意する必要があります。</p>

ス ラ イ ド 8	<p>【聞き取り】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 面談 保護者及び本人（年齢等考慮）と面談を行う。 ・ 本人・保護者の願い ・ 現在の家庭での様子や困っていること ・ これまでの生育歴やどのような支援を受けてきたか（個別の教育支援計画等で確認） ○ 引継ぎ資料 ・ 個別の教育支援計画や個別の指導計画など ・ 上記以外の資料にも、問題行動等の記載が見られる場合には、二次的障がいの可能性を考える必要がある。 	<p>◆聞き取りのポイントです。</p> <p>◆引き継ぎ資料がある場合でも、保護者及び本人（年齢等考慮）との面談は必要です。現在の本人・保護者の願いや家庭での様子や困っていることなどについて情報を得る必要があります。学校で見せる姿と家庭での姿は異なることもあります。</p> <p>◆個別の教育支援計画等の引継ぎ資料がある場合には、これまでどのような支援を受けてきたか確認することができます。</p> <p>◆指導要録等の行動面にも、気になる記載がある場合には、二次的障がいの可能性を考え、対応を検討する必要があります。</p>
ス ラ イ ド 9	<p>【聞き取り】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 関係機関から得られる情報 ・ 診断に関する情報、健康面や医療に関する情報 ・ 福祉サービスやその利用に関する情報 ・ 心理検査の結果や学校で配慮すべき事柄など 個人情報取扱いに注意！！ ※ 保護者の同意と了解を得る。 了解が得られない場合 一時間を掛けて信頼関係を築く。 外部機関と連携を図った支援の必要性について理解してもらう。 	<p>◆関係機関から得られる情報として、</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 診断に関する情報、健康面や医療に関する情報 ・ 福祉サービスやその利用に関する情報 ・ 心理検査の結果や学校で配慮すべき事柄 などが 있습니다。 <p>◆個人情報となるため、取扱いには十分に気を付けてください。また、保護者の同意と了解を得る必要があります。</p> <p>◆了解を得られない場合には、時間を掛けて信頼関係を築きながら、外部機関と連携を図った支援の必要性について理解してもらいます。</p>
ス ラ イ ド 10	<p>【主な検査】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 田中ビネー知能検査Ⅴ ○ WISC-Ⅲ、Ⅳ知能検査 ○ K-ABCⅡ心理・教育アセスメントバッテリー ○ DN-CAS認知評価システム ○ 新版K式発達検査 ○ DTVPフロスティック視知覚発達検査 ○ S-M社会生活能力検査 <p>この他にも様々な検査があり、対象の子どもの実態や目的に応じた検査を実施する。</p>	<p>◆次に検査についてです。現在行われている主な個別式検査を挙げてみました。</p> <p>◆田中ビネーからフロスティック視知覚発達検査までが直接的（検査者が子どもを直接検査する）な検査です。</p> <p>◆S-M社会生活能力検査が間接的（検査者が子どもを直接検査するのではなく、子どもの日常生活をよく知っている保護者や担任教師が回答する）な検査です。</p> <p>◆この他にも様々な検査があり、対象の子どもの年齢・実態や目的に応じた検査を実施します。</p>

ス ラ イ ド 11	<p>諸検査を実施する上で大切な視点</p> <ul style="list-style-type: none"> ○ 検査の目的（検査を通して知りたいこと）を明確にして実施する。 ○ 検査結果や検査時の様子、日頃の様子を関連させて、総合的な解釈を行う。 <p>※ 本人・保護者へ事前事後の説明を行う。</p>	<p>◆検査を実施する上で大切な視点です。</p> <p>◆検査を受けること自体が目的であってはありません。</p> <p>◆検査をすれば、その子どもの能力が数値として出ますが、数値を知ること、測ることが目的ではなく、検査結果を基にどのような支援を行うかなど、目的を明確にした上で、本人や保護者に説明し、同意を得て実施することが大切です。</p> <p>◆検査の結果は、その子どものある一面の結果であり、能力全てを表している訳ではありません。検査の数値的な結果だけでなく、検査時の様子や日頃の様子などを関連させて、総合的な解釈を行う必要があります。また、結果を基にした、支援の方向性や具体的な手立てなどを本人や保護者に示すことが大切です。</p>
ス ラ イ ド 12	<p>実態把握の留意点</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 情報収集だけで終わらない。 ● 子どもと関わりながら観察する。 ● できること、可能性に目を向ける。 ● 柔軟な目で子どもを見る。 ● 現象面にとらわれず、行動の背景を理解する。 ● 複数の目で子どもを見る。 ● 得られた情報を総合して子どもを理解する。 ● 継続して子どもを見る。 	<p>◆実態把握の留意点です。</p> <p>◆情報収集だけで終わらせず、それを基に実態に応じた有効な手立てを考え、実践に結びつけることが必要です。</p> <p>◆客観的な観察だけでなく、子どもと実際に関わりながら実態を把握します。</p> <p>◆繰り返しになりますが、できること、可能性に目を向けながら、柔軟な目で子どもを見ます。</p> <p>◆場にふさわしくない言動が見られることもありますが、現象面にとらわれず、行動の背景・要因が何であるか理解できるように見ていきます。</p> <p>◆そのためにも、複数の目で子どもを見て、多くの情報を収集し、得られた情報を総合して子どもを理解していく必要があります。</p> <p>◆子どもは日々成長しているため、継続して子どもを見ていく必要があります。</p>

ス ラ イ ド 13	<p style="text-align: center;">情報の共有と活用</p> <p>学年部の教職員や各教科担当の教職員等と情報交換を行いながら、得られた情報をまとめる。</p> <p>※子どもの実態に応じて、必要な項目に記入する。</p> <p>愛媛県教育委員会特別支援教育課HPよりダウンロード可能</p> <p>○ 個別の教育支援計画等に明記する。</p> <p>○ 全教職員の共通理解の下、合理的配慮が行えるように活用し、変更が見られたときには加筆修正する。</p>	<p>◆最後に情報の共有と活用です。</p> <p>◆先程も「複数の目で」と話をしましたが、学年部の教職員や各教科担当の教職員等と情報交換を行いながらまとめていきます。</p> <p>◆愛媛県教育委員会特別支援課のホームページに実態把握の資料が掲載されているので、活用してください。</p> <p>◆そして、明らかになった実態は個別の教育支援計画等に明記します。</p> <p>◆全教職員の共通理解の下、合理的配慮が行えるように個別の教育支援計画等を活用し、変更が見られたときには随時加筆修正を行います。</p>
ス ラ イ ド 14	<p>研修の内容</p> <ul style="list-style-type: none"> ・実態把握とは、子どもを（ ）することである。 ・（ ）（ ）（ ）を通じて情報収集を行う。 ・現象面にとらわれず、行動の（ ）を理解する。 ・（ ）に目を向ける。 ・（ ）等に明記し、情報の共有と活用を図る。 	<p>◆本日の研修はここまでとなります。</p> <p>◆（ ）の中に言葉が入りましたか？（まだの場合は少し時間を取り、記入してもらう。）</p>
ス ラ イ ド 15	<p>研修の内容</p> <ul style="list-style-type: none"> ・実態把握とは、子どもを（ 理解 ）することである。 ・（ 行動観察 ）（ 聞き取り ）（ 諸検査 ）を通じて情報収集を行う。 ・現象面にとらわれず、行動の（ 背景 ）を理解する。 ・（ できること、可能性 ）に目を向ける。 ・（ 個別の教育支援計画 ）等に明記し、情報の共有と活用を図る。 <p>行動の様子や事実を具体的に表記する。 「集中できる時間が短い。」 →「授業開始後10分間は、話を聞いたり、問題を解いたりできる。」</p>	<p>◆では、研修の内容を確認します。</p> <p>◆（スライドを読む）</p> <p>◆個別の教育支援計画等に明記する際には、行動の様子や事実を具体的に表記することが大切です。スライドの例の様に、否定的な表現での実態把握では、指導・支援につながらず、その場その場の対応になってしまいます。子どもの視点で、行動の様子や事実を具体的に書くことが、その後の支援、具体的配慮を考える際の手掛かりとなります。</p> <p>◆以上で研修を終わります。</p>